黄昏時、カフェの隅、手帳の続き

黒井有利

・登場人物

黒壁 季咲（キサキ）……現代の女子高生。紙の本や古風なカフェが好き。
自分の趣味が同年代の大多数と違うことを自覚しており、
それでも好きなことを貫く強さがある。

屋敷 千鶴（ちづる）……大正時代の女学生。時代に囚われない自由な発想を持つが、
周りに逆らえず行動に移せない。婚約者がいる。
愛称は「ちづ」

神屋敷 薫（カオル）……キサキの幼なじみ。紙の本の良さがわからない。
意外とお坊ちゃん。

琴子（ことこ）……千鶴の家に仕える使用人。千鶴の世話係。愛称は「こと」

店主……キサキが訪れたカフェの店主。コーヒーが苦手。

時間警察……タイムパラドックス修正課のベテラン刑事。

・あらすじ

現代の女子高生・キサキは最近通っているレトロなカフェの隅で古びた手帳を見つける。彼女が単なる思いつきでその手帳に書き込みをしたことから、大正時代の女学生・ちづるとの交流が始まる。
彼女たちは手帳を通じてお互いを知り、仲を深め、次第に惹かれ合う。しかし、埋められない時間と価値観の差が彼女たちを引き離してしまう。

【第一場】

女子高生一人とカウンター内の店主の他に誰もいない古風なカフェ。日が少しずつ傾き始めている。

キサキ　『夕暮れが迫るころ、私は一人、和室の隅で佇んでいた。白い婚礼衣装の裾が、静かな光を浴びて薄く輝いている。鏡の中から自分を見つめるその眼差しに、今はもう、何も感じられなかった。まるで他人のもののように、その姿は虚ろで、どこか無機質なものに思えてならなかった。「私は一体、どこへ向かおうとしているのか。」

私は無意識に呟いた。結婚とは、そうしたものなのだろうか。ただ義務を果たすために、心を捨て去ることなのか。

そのとき、ふと扉が開き、母が部屋に入ってきた。彼女は何も言わず、ただ私を見つめる。

私の心の中の何かが少しずつ崩れ始めていく気がした。』

決められた結婚か……。なんてくだらないことなんだろ。

好きな相手と一緒じゃなきゃ幸せになんてなれるはずないのに。

大正時代に生まれなくてよかった。

店主　あ、それ、今度アニメ化するんだって。トイレにポスター貼っといた。

キサキ　へぇ。最近レトロなの流行ってますねー。

店主　この流れに乗って、ウチももう少し流行らないかなー……。

キサキ　ね、キサキちゃん、今度学校のお友だち連れてきてよ～。

店主　誘ったことありますけど、来ませんでしたよ。

みんなスタバ行くんですって。

あー……やっぱりあの、フラペチーノ？

飲み？　食べ……？　飲みに行くんだねぇ。ウチでも出すかぁ。

いや、今はアサイー？　それともバナナジュース？

逆に今こそタピオカなのかも……。

店主、ブツブツ言いながら店の奥にはける。

キサキ　こりゃ当分は穴場のままだね。

キサキ、小説に栞をはさみ、机の上に置く。
夕日が差し込み、机の上を照らす。
光が差した先、机の端と壁に挟まれている手帳に目がとまる。
手帳の表紙には「記録帳」と書かれている。

キサキ　記録帳……？　何の？
もしかして、この店の帳簿？
こんなとこ置いてていいのかなー……。

キサキ、カウンターの方を見て、店主がいないことを確かめる。

キサキ　まぁ、ちょっと、ちょろっとだけね。
ほとんど私が落としてるコーヒー代だろうけどね。

キサキ、記録帳を開く。

キサキ　……何これ。帳簿じゃないじゃん。
『穏やかで心地よきひとときが、静かに流れております。まことに素晴らしきお店でございます。さて、あと何度このお店に足を運ぶことができるのでしょうか……。家の者に悟られぬよう、またこっそりと訪れることを決めました』
小説……？じゃ、ないか。記録帳……もしかして、「お客さまの声」的な？
また風情のあるもん置いてるな～……って、大正十二年!?
すっご！　老舗じゃん！　へぇ～！

キサキ、ページをめくる。

キサキ　『先日の通り、またこちらに足を運びました。』
ちづる　『何とも心が落ち着く、素晴らしいお店でございます。
願わくば、もう少しだけ、私だけの静かなひとときがここにありますように。
なんて、店主様に申し訳ないかしら。また必ずお伺いさせていただきます』
キサキ　へぇ、この頃からあんまり人来てなかったんだ。
よくもってるなぁ、この店……。

それにしても、最後の書き込みが大正時代なんて、流石に人来な過ぎ。
しょうがない、私も書いてやるか……。
『私も自分だけの居場所みたいで少し嬉しいので、いつまでも穏やかな店内であってほしいと思います。令和』……何年だっけ。
まいっか。『二〇二五年七月』、と。

キサキ、手帳を閉じる。
ちづる、店にやって来る。
ちづる、カフェの椅子に腰掛け、手帳を開く。
すると、先日書いた後に一文足されている。

ちづる　あら、何でしょう？　先日来た時には無かった文章……。
私以外にもこの手帳に書き込んだ方がいらっしゃるのね。
二〇二五年？　あら、百年後から……？
ふふ、いたずら好きの方なのね。面白い。
どちらの方なのかしら……。
キサキ　大正時代か……ちょうどこの小説みたい。
あ、もっと前のもあるかな。

キサキ、もう一度手帳を開く。

ちづる　『貴方様は、どちらの方でいらっしゃいますか。
こちらには、いかほどの時よりおいでになっておりますか』
キサキ　え？　何これ？
さっき書いた時には……無かったよね……？
ちづる　『え？　どういうことですか？　これ、今読んで返事書いてるんですか？』
なんだか、少し不思議な文章ですね。
二〇二五年……もしかして、本当に未来の方なのでしょうか。
『ええ、私は貴方様の書き込みを拝読しております。まさか、百年も未来の方とは、何とも面白いお方でいらっしゃいますね』
キサキ　『え、本当に大正から？　今令和なのに？そっちの方が面白い冗談でしょ』
ちづる　『私はちづると申します。
貴方様のお名前も、どうぞお教えいただけますでしょうか』

キサキ　『私？　……きさきです』
ちづる　『きさき。素敵な響きでございますね。
　　鋭さを持ちながらも、繊細で美しい音色を感じさせます』
キサキ　この人すごい……。
　　名前を教えただけなのに、すらすら綺麗な言葉が出てくる……。
　　『ちづるって、人を褒めるの上手いね』
ちづる　『もしよろしければ、お友達になっていただけますでしょうか。
　　そして、もう少しこの帳面にてお話くださいませ』
キサキ　『もちろん！』
ちづる　『では、私のことは「ちづ」と…』
ことこ　お嬢様。
ちづる　！
　　……こと。どうしてここへ？
ことこ　日が暮れてまいりましたので、お迎えに上がりました。
　　ご学友からここにおられるとお聞きしましたもので。
ちづる　そう……。では、帰りましょう。

　ことこ・ちづるが店を出る。

キサキ　……あれ、返事こなくなっちゃった。
　　うーん、何なんだろ、この手帳……。
　　もしかして、夢？　明晰夢ってやつ？　私、カフェの席で寝ちゃったのかな。
　　……はぁ……。そろそろ暗いし、帰ろ。

　キサキは手帳に本の栞を挟んで、閉じる。

【第二場】

　キサキとカオルが帰路についている。
　2人が店の前に着く。

カオル　はぁ？　何だよ、珍しく一緒に帰ろうなんて言うからついて来たら……。
　　またこの古臭いカフェかよ～。
キサキ　いいじゃん、少し寄ってくだけ。
　　カオルも入ったことあるじゃん。
カオル　少しって……前は二時間も居座ってただろ。
キサキ　一時間半くらいだよ。
カオル　あのさぁ、いつまでここに入り浸ってんだよ。
　　キサキ、クラスでシニアちゃんって呼ばれてるぞ。
キサキ　別にいいよ。趣味は人それぞれでしょ。
　　一緒にカフェ行こうって言ってるだけじゃん。
　　ね？
カオル　いつもは一人で行くからとか言ってるくせに。
　　絶対さっき言ってた夢のせいだろ？
キサキ　うん。
カオル　くだらねー。
キサキ　でも、本当かもしれないんだって！
　　手帳に文字が増えるの！　信じらんないでしょ!?
　　ね！　確かめに行こうよ！

カオル　嫌だよ。そんなことあるわけないだろ。
　　もう高校生なんだから、みんなとスタバでも行ってこいよ。
　　じゃ、俺ゲーセン行くから。

　　カオル、立ち去る。

キサキ　はぁ？　ゲーセン？
　　そっちの方が非生産的でしょ。
　　ちょっとくらいいいじゃん。つれないヤツ。

　　キサキ、カフェに入る。

キサキ　こんにちはー。
店主　いらっしゃーい。

ちょっとぉ、外で何やってたの？
痴話喧嘩ならよそでやりな～。

キサキ　全然、そういうんじゃない。
一緒にこの店入ろうって言っただけ。
私いつもの。奥の席にいるから。

店主　はーあ、思春期は怖いね～。

キサキ　ちゃかさないで！

店主　はいはい。

キサキ、席につく。
店主がコーヒーを持ってやってくる。

店主　お待ちどうさま。ごゆっくりどうぞ。

店主がカウンター内に消える。
キサキが手帳を開く。
ちづるとことこがカフェに入って来る。
ちづるだけ席に着き、手帳をひらいて栞を手に取り、持っていた別の栞を挟む。

キサキ　……あれ、昨日挟んだ栞じゃない……？

ちづる　『この栞の何とも美しいことでしょう。
こちら、頂戴してもよろしいでしょうか。
代わりに、私のお気に入りの栞を挟ませていただきます。
果たしてこれでお渡しできるかどうかはわかりませんが……』

キサキ　綺麗な押し花……。
『ありがとう！どうぞ、栞はもらって。
この栞、大事にするね！』

ちづる　『ありがとうございます。
本日は、お付きの者を伴い参りましたゆえ、長らくお話することが叶いません。
また明日、こちらへ参ります。
その折には、ゆるりとお話などお聞かせくださいませ』

ちづるが手帳を閉じる。

ことこ　千鶴お嬢様、気が済みましたか。
ちづる　……ええ。ありがとう、こと。
ことこ　急がないと旦那様が戻られます。
もうお嬢様は婚約者のいる身です。
他のご令嬢のように放課も自由に出歩いていては、旦那様に叱られますよ。
ちづる　そうね。ごめんなさい。
あなたにこれ以上迷惑はかけないわ。
ことこ　迷惑だなんて、とんでもないことでございます。
私はお嬢様の世話係ですから。
ただ、旦那様からの目が今以上に厳しくなれば、カフェーに寄ることさえも禁じられかねません。
ちづる　わかっているわ。
……ねぇ、こと。
祝言の日はいつだったかしら。
ことこ　来月の一日です。
……お嬢様、どうか気を落とさないでください。
誰でもいつかは殿方に嫁ぐのです。
それが少し早いだけですから――
ちづる　わかってるの。
でも……少し、寂しく感じてしまうのよ。

いつの間にか日が暮れ始めている。

キサキとちづるはカフェの席でお互い手帳に向かっている。

キサキ　『お付きの者って……ちづるってお嬢様なんだ！　すごい！
言葉遣いがなんだか上品だと思ってたんだよね～！』

【第三場】

ちづる　『とんでものうございます。
　　ささきの言葉には、不思議と心温まるものを感じております』
キサキ　『何それ。テキトーなだけだよ。
　　小説たくさん読んでも、文章がうまくなるとは限らないんだなこれが』
ちづる　『小説を読んでいらっしゃるのですね。
　　私の周りでも読書が流行しておりますの』
キサキ　『あ、そっか。今は古臭い私の趣味も、百年前だったら流行りの娯楽なんだ』
ちづる　『ささきが古臭いだなんて、とんでものうございます。
　　ここはとても新鮮で素敵な場所でございますし、女学校では少女小説がよく
　　嗜まれておりますのよ』
キサキ　『百年後もそのカフェがそのまま残ってること想像してみなよ。
　　色褪せた看板見て一緒に入ってくれる子なんていないんだよね。
　　ま、趣味は人それぞれだから』
ちづる　『ささきは、世の流れにただ身を任せることなく、
　　自身の想いを貫かれておりますのね……』

　いつの間にか時間警察がカフェにいる。

キサキ　『人に流されないってこと？　まぁ、よく言えばそうだけど。
　　……でもさ、ちづみたいに受け入れられるっていうのも、すごいと思う』
ちづる　『受け入れる、でございますか』
キサキ　『まぁそれが不本意でもね？
　　いったん聞いて、受け入れる……。私は苦手だから、そういうの。
　　何でも自分の考えを聞いてもらおうとして、もめちゃう』
ちづる　『私は、ささきのそのようなお心根も……素敵だと思うのです』

　日が落ち、ちづる・キサキが手帳を閉じて席を立つ。
　時間警察が手帳を見に行く。
　書き込みが見つからず、時間警察は元の席に戻る。
　ちづる・キサキが戻って来る。

キサキ　『こんなに趣味が合う人、初めて会った！
　　あぁいや、会ってはないのか。

文面でしか見てないのに、目の前にいるような……なんだか不思議な気分』

ちづる　『私もまた、同じように感じております』

キサキ　『ちづみたいな家族がいればよかったのに』

ちづる　か、『家族でございますか』!?

キサキ　『まぁ、家族じゃなくてもさ、近くにいたらよかったなぁって。人と話してこんなに楽しいのなんて久しぶり。親は忙しくてあまり家にいないしさ』

ちづる　か、家族……。そんな、私なんかが、恐れ多い……。

キサキ　『いいよね、ちづは。お付きの人がいるってことは、家にもいっぱい人がいるんでしょ』

ちづる　……。

『……ええ、そうでございます。我が家には、常に人の気配があり、絶え間なく誰かが居ります。しかし、それはまるで見張られているような、あるいは……閉じ込められているような、逃げ出したくなるほどの息苦しさを覚えるのでございます』

キサキ　『え、どうして？』

ちづる　『……私には、許婚(いいなづけ)がございます。祝言のその日まで、清き身を保たねばならぬと、微かな所作さえも慎まねばならぬと……屋敷には、そのような空気がございます。お相手がいることは、世間においては幸せなことでございます。けれど、私の心は未だ、追いついてはおりません』

キサキ　『ふーん……。相手のこと、嫌いなの？』

ちづる　『お相手に非があるわけではございません。とてもお優しく、立派なお方にございます』

キサキ　『あんまり知らない人なわけね』

ちづる　『……そうでございます。このような思いを抱くことは、罰当たりなことだとわかっております。ただ、嫁ぎ先はこの地よりやや離れており……このカフェーにも、足を運ぶことは叶わぬやもしれません』

キサキ　『えぇ!?　それは嫌だ！せっかく仲良くなれたのに！』

ちづる　『私も……同じ思いでございます。けれども、来月一日には、もはや此処へは参れぬようにございます』

キサキ　『私なら、そんなの受け入れられない』
ちづる　……。
キサキ　『ねぇ、結婚なんてさ、やめちゃおうよ』
ちづる　『え、』
キサキ　『好きでもない人と一緒になってもきっと幸せになんてなれないよ』
ちづる　『けれど、』
キサキ　『それとも、ちづは私とこうやってやりとりできなくなってもいいの？』
ちづる　『それが……そう、嫌なのです。嫌に決まっております。
けれども、そうはまいりません。
私は、屋敷家のひとり娘。
家の名を守ること、それが何よりも優先されるのでございます。
己が心など、二の次にて』
キサキ　『あっそう。ちづはそれでいいんだ』
ちづる　『キサキ――』

キサキが手帳を閉じて、席を立つ。

【第四場】

キサキの帰路、カオルが後をついて来ている。

カオル　……なぁ、あのカフェ、潰れたのか？
キサキ　……はぁ？　なわけないでしょ。
百年以上生き残ってんだよ。
カオル　でも最近行ってないしさ……ってかなんでそんなに不機嫌なわけ？
俺なんかした？
キサキ　……。（首を左右に振る）
カオル　うーん、前言ってた夢の話と関係ある？
キサキ　……部分的にそう。
カオル　アキネーターかよ。
えーっと、何だっけ。

百年前の手帳のお嬢様？
……え、もしかして、夢で見た文章と喧嘩したのか？

キサキ　何よ、その言い方。夢じゃなかったの。
あの後確かめたって言ったでしょ。

カオル　聞いたけどさぁ……。
あ、あの店行かなくなったんなら、スタバ行こうぜ。
グループのみんなで。

キサキ　気分じゃない。
じゃ、またね。

カオル　あ、うん、また明日……。うーん……。

キサキとカオルが別れる。
カオルは来た道を戻り、カフェの方へ向かう。

カオル　来てしまった……。
ここ一人で入るの勇気要るんだよなぁ。
俺コーヒー飲めないし……。
でも、まぁ、気にはなるし……っよし。

カオル、店に入る。まだ日は高い。

カオル　こんにちはー……。

店長、カウンターの奥から出てくる。

店主　いらっしゃーい。
あれ？　初めてじゃない？　1人で来るの。
どうぞ、どこでも座りなよ。
あ、キサキちゃんがいつも座ってるのは、奥の席ね。

カオル　あの、俺、その……。

店主　ココアでしょ。ちょっと待っててね。

カオル　え、あ、はい。ありがとうございます……。
ナニコレ、心読まれてんの？

もしかして店主まで百年生きてる妖怪なのか……？

カオル、奥の席に座り、机の端の手帳を見つける。
手帳を開くが、２人のやりとりが見つからない。

カオル　『また必ずお伺いさせていただきます。　大正十二年』
……え、なんだよ。この文が最後じゃんか。
キサキの書き込みも名前だって書かれてない。
……全部嘘だったのか……？

店主　お待ちどうさま。ココアです。

店長、奥の席にココアを置く。

カオル　あ、ああ……ありがとうございます……。
店主　ん？　何それ。
カオル　え？　あ、いや、これは……
店主　あぁ、ソレね。どこで見つけたの？
ってかカオル君、読んでも達筆過ぎてわかんないでしょ。
それ、大正時代の女学生が書き置いたまんま、残ってるんだ。
カオル　え、あ、あの、その人って……
店主　ん？　女学生のこと？
あー……いや、わかんないな。
ご先祖様の日記によると、ある日を境に来なくなったみたいだったけど……
カオル　ある日……？
店主　そこまではわかんない。
記録帳も日記も全部は残ってないんだよね。
じゃ、ごゆっくり。
カオル　そ、そっすか……。

店主、カウンターの奥へ消える。
夕日が机に差す。
手帳に文字が浮かび上がり、２人のやりとりが出てくる。

カオル　……え？　えぇ!?
文字が出てきた!?

ちづるとことこが店にやって来る。
ちづるだけ席に座り、手帳を開く。

ちづる　『先日は失礼をいたしました。
あの後、幾度も思い悩み、考えを巡らせました。
そして私……思い切って、父に申し上げました。
「この婚約を破棄できませぬか」と……。
思いの外、父は寛大にございました。
破棄するわけには参らぬけれど、祝言をしばし延ばしてもよいと、仰せになりました。
それもこれも、貴女のおかげにございます。
ありがとう、きさき』
ことこ　お嬢様、よかったですね。
ちづる　ええ、ありがとう、こと。本当に……。
……でも、私……あなたに、謝らないといけないことがあるの。
ことこ　なんでございましょう。
カオル　これって……。
ちづる　『ああ、けれども……、心の内を口に出したその瞬間、
私は己の想いに気づいてしまったのでございます。
されど、きっとこの想いは、もはや貴女には届きませぬ。
気高く強き貴女は、弱き私を見限り、遠く離れてしまった……。
もしも、貴女も同じ想いを抱いていてくださったなら、どれほど救われたことでしょう。
今は語り合うこと叶わずとも、私はきっと一生貴女を忘れることなどできませぬ。
さようなら、わが愛しきひと。
どうか……どうか、お元気でいてくださいませ』
こと、ごめんなさい。私――
ことこ　お嬢様、旦那様もそこまではお許しには……。
ちづる　そうかもしれないわね。

でも、ごめんなさい。
この心に気づいてしまったら私……結婚はできないわ。

カオル、消える。

【第五場】

キサキ、いつもの帰り道。

キサキ　まったく、カオルのやつ、私に何も言わずに休むなんて……。
メッセージに既読もつかないし。
何なの？

キサキ、いつものように店に来てしまう。

キサキ　あぁもう、自分の帰巣本能に嫌気が差す。
……手帳、あの後何か書いてあるかな……。

キサキ、店に入る。
店主がカウンターの奥から現れる。
奥の席に時間警察が座っている。

キサキ　こんにちは……。
店主　いらっしゃーい。
あれ、初めて見る顔だね。
キサキ　え？
店主　え？

二人が顔を見合わせていると、カオルがカウンターの奥から現れる。

カオル　店長、お客さんですかー？

あれ、その制服、うちの学校じゃん。
ここまでちょっと遠いのに、よく来たね。

キサキ　は？

店主　今日は一度に二人もお客さんがいて賑わってるなぁ～。

キサキ　えっ？

カオル　ちょっと、自虐やめてくださいよ。
お客さん困ってるじゃないですか。
……お客さん？

キサキ　いや、え？　あの……。

警察　君、キサキちゃんだよね。

キサキ　は？　え、あなたどなたですか……？

警察　少し、奥で話そう。

店主　マスター、コーヒーをもう一つ。
はい、ただいま。

時間警察、奥の席に座る。
キサキ、戸惑いつつも促されるまま向かいの席に座る。

キサキ　あの……。

店主がコーヒーを持ってやってきて、キサキの前に置く。

店主　はい、いつものね。

キサキ　え？　待って、どういう――

警察　単刀直入に言おう。手帳を渡してくれないか。

キサキ　手帳……？　って、そこの記録帳のことですか？
渡すも何も、私のものじゃ――

警察　ここには君の書き込みが無かった。
どこかに隠しているんじゃないのか？

キサキ　は？　ってかさっきから何なんですか？
名乗りもしないで、こっちだけ一方的に名前を知られてるなんて。

怪しさ満点なんですけど。
警察呼びますよ。
警察　はぁ……。
君は今、自分がどれくらいの罪を犯しているかわかっていない。
キサキ　あの、何のことかさっぱりなんですけど――

カオル、急に時間警察の横に現れる。

カオル　キサキは悪くない。
手帳に書き込んだだけで人が死んじゃうなんて、わかるわけないだろ。
なぁ？
キサキ　え？　あれ？
あんた、さっきはあっちにいて……

カオル、また急に消える。

キサキ　何……？　何が起こってるの？
警察　だから言ってるだろ。
過去を変えたらそれだけの代償を誰かが背負うことになるんだ。
キサキ　いや、今初めて言ったでしょ。
警察　そうか、なら君視点ではそうなっているんだな。
君が手帳に書き込んだ何かのせいで、時空が揺らいでいるんだ。
誰かが時空にかかった負荷を受け止めなければならない。
キサキ　はぁ？　何それ。
てか誰かって……？　それがカオルってこと？
それとも私？
警察　屋敷千鶴だ。
キサキ　……え？
警察　本来であれば彼女は結婚し、大正十二年の震災前に嫁ぎ先へ引っ越していた。
しかし、君がここに来たことで結婚が先延ばしにされ、火災に巻き込まれる。
キサキ　……は？　震災？
そんな……、なんで？　何それ。
だって、ちづは……

警察　言ったろう。
過去を変えたら、誰かが代償を背負うんだ。
キサキ　そんな……。
それが、なんでちづになるの？
私のせいなんだったら、私でいいじゃん！
こんなの絶対おかしい！
それにちづは、私が何を言おうと結婚して……

カオル、今度はキサキの横に急に現れる。

カオル　手帳にはこの前の続きがあるんだ。
きっとキサキと喧嘩した後、ちづるさんは思い直して、そしてキサキに――
キサキ　あんたはさっきから何!?

カオル、また消える。

警察　世界は君だけが納得できるようにはできていない。
いろんな生き物の行動が積もり積もって、過去が作られる。
わかってくれ。
キサキ　……何よ、それ……。

キサキが俯いている間に、夕日が机に差す。

警察　な、急に文字が浮かび上がった……!?
これは、いったい……。
キサキ　これ、この前の、続き……。
ちづ、私……私も――
警察　なるほど、こういうことだったのか。
君の言葉で彼女は結婚を遅らせた。いや、婚約破棄しようとした。
その決断が、彼女を死地へと追いやった。

キサキ　……全部、私のせいなんだ。
……でも、どうすればいいの？

警察　その手帳を渡してくれ。
それさえあれば、私が今までの全てを無かったことにできる。
キサキ　無かったことに？
警察　ああ。
この手帳についての記憶を君たちの中から消すんだ。
キサキ　……そう。
そうだね……それが、一番いいはず、だよね。

ちづるがカフェに現れる。

ちづる　『ごきげんよう。
どうか、今日こそはおいであそばしていらっしゃるかしら』
キサキ　『ごめん、ちづ。
ここにはもう来られなくなっちゃった。
私、あなたに悪いことを教えちゃった。本当にごめん。
あなたは結婚して、生きなくちゃならない。
私……私、ちづの気持ちには応えられない。だから……』
ちづる　『……ええ、そうなのですね。
今までほんとうに愉しゅうございました。ありがとう。
いつかきっと、逢いにまいりますわ』
キサキ　……。

キサキ、手帳を閉じる。
ちづる、栞を取り出して何か書く。
ちづる、カフェから去る。

警察　もういいか？
こうしている間にも取り返しのつかないことに――
キサキ　大丈夫です。持っていってください。
……ご迷惑おかけして、すみませんでした。
警察　君は本来交わらないはずの相手と偶然関係を持ってしまっただけだ。
これからは、目の前の人を大切にしてやるんだな。
キサキ　……。

警察　　もう会わないことを祈っている。

時間警察、消える。

時間警察が消えた席に、幼なじみがやってきて、座る。

カオル　通話してたん？

キサキ　……え？

カオル　いや、え？

話し声が聞こえた気がして……あっ（キサキの赤く潤んだ目が見える）

あー……気のせいか。

あ、それよりさ、この前勧めてもらった小説、映画化すんだって！

今ポスターがトイレに貼ってあった。

キサキ　……そう……

カオル　あれ？　興味なかった？

えー、俺も最近読み始めたからさ、その話しようと思ったんだけど……

カオルが本を取り出す。

キサキ　……カオルが？　小説？　……紙の本で？

カオル　そう！　いやー、今どき紙なんてさ、

古臭いし嵩張るし不便だよなーって思ってたんだけど。

確かにキサキの言う通り、手触りとかページを捲る感じとか、なんか風情があっていいなぁって……

カオル、本を開き、栞を抜く。

キサキ　風情って。

あんたから出そうにないワード第2位くらい……ね……

キサキ、その栞に気づく。

キサキ　！　それ……

カオル　え？　何？　これ？　栞だろ？
キサキもよく使ってんじゃん。
キサキ　いや、そうだけど……どうしたの、それ。
カオル　え？　あー……確か……そう、蔵だ。
ばあちゃん家のさ。
ほら、あそこの辺だと珍しい旧家じゃん？
家は一回建て直してるけど、蔵はそのまま残ってたらしくて。
前に見せてもらった時、百年くらい前の着物とかそういうのも残っててさ。
そん中にあったから、綺麗だな～と思って……。
キサキ　……そう、なんだ……
カオル　あ、いや、決してキサキのヤツに似てるからとかではなくて！
……って、え……

キサキ、いつの間にか涙を流している。
栞には『逢いにまいりました』と掠れて消えそうな達筆で書かれている。

キサキ　会いに来てくれて、ありがとう。

終わり